国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜基調講演＞漢字とどうつきあうか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿辻, 哲次 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000898

基調講演

漢字とどうつきあうか

阿辻 哲次（京都大学大学院教授）

あつじ・てつじ
京都大学大学院教授。専門は中国文化史、中国文字学。文化審議会国語分科会漢字小委員会委員として、常用漢字表の改定に携わる。著書に『戦後日本漢字史』（新潮選書、2010年）、『漢字道楽』（講談社学術文庫、2008年）、『漢字のはなし』（岩波ジュニア新書、2003年）など。

ただいま所長からご紹介いただきましたように、さきほど海外出張から戻ったばかりです。私は中国語を専門としますので、中国や台湾へはこれまで長期・短期を混ぜて50回ぐらい行っていますが、今回はなんとスリランカという、まったく想定もしなかったところへ行っておりました。スリランカは暑いところですが、大変美しいところでした。

図1 スリランカ大学の掲示板

これは、スリランカのある大学の掲示板の写真です（図1）。丸っこい文字はシンハラ文字といい、表音文字だそうです。スリランカは3種類の言語を使っており、これはそのうちのシンハラ語を表記する文字です。次にあるのはタミール語を表すタミール文字、これは北部に多いと聞いています。そしてもう一種類が英語です。

スリランカでは街の標識や看板、たとえば「空港へ行くにはここを曲がれ」とか「ここから○○という町まではあと何キロ」という表示には、シンハラ語とタミール語と英語の3種類の文字が使われています。ただしいうまでもなく、それぞれの言語は1種類の文字で書かれます。所長からのご挨拶の中でもキーポイントとして触れておられましたが、一つの言語を書く文字は1種類というのが世界の共通です。

スリランカには3種類の言語があるので、3種類の文字が使われます。しかしこの点で日本語は非常に特殊な表記体系を持っていて、漢字と平仮名・片仮名、それにローマ字の4種類、中には「βカロチン」などという言葉を使うときにはギリシャ文字も使います。ギリシャ文字を使うのはα、β、γぐらいでしょうが、日本語はそういう複数の文字を使って表記する、世界でも大変珍しい言語です。

日本語のこのような性格に似たものとしては、韓国語がそれに近いかもしれません。韓国語はその気になれば漢字ハングル混じり文を書けるようですが、しかし実際には使われていません。また、韓国語での表音文字はハングル1種類ですが、日本語では平仮名と片仮名の2種類を持っています。

そのような状況に直面して、われわれの文字生活をどう考えていったらいいかというのが、今回のフォーラムの趣旨と思っています。今日は自分なりに日ごろ考えていることをお話しさせていただこうと思います。

◆世界の文字

ここにはウイグル文字とカロスティ文字とタミール文字があります（図2、図3、図4）。この資料を作ったときは、まさか自分がスリランカに行くなどということは夢にも思っていませんでしたが、タミール語についてはかつて大野晋先生が『日本語の起源』で、日本語の起源はタミール語であるという説を展開されて、賛否両論かなりにぎやかな議論になったことがありました。そのときにタミール語とかタミール文字という名称をお聞きになったこともおありかと思います。私もそのときにはじめて身近な文字として感じました。

このほかにも世界に文字はたくさんありますが、文字に関しては中西印刷という京都にある印刷会社を忘れてはいけません。京都大学の印刷物もたくさん作ってくださる会社ですが、そこの先代の社長が大変な文字の研究家でした。いわば文字おたく、文字マニアで、お仕事を息子さんに譲られてから後、奥さまと世界各地を旅行され、チラシ、マッチ箱、蚊取り線香の箱、割り箸の袋など、文字が印刷されているものを大量に集めて帰ってこられました。その成果は大阪にある国立民族学博物館に寄贈され、現在整理中だと伺っています。その業績を継いで、中西印刷のホームページには「世界の文字」というページがあり、そこにたくさんの文字の例が並んでいます。私や学生は、ある文字についてどのような文字かを調べる必要があるときには、まず真っ先に中西印刷のページに入る習慣を持っています。

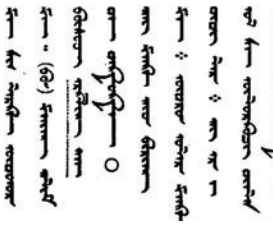

図2 ウイグル文字

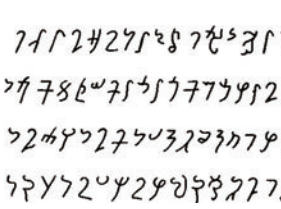

図3 カロスティ文字

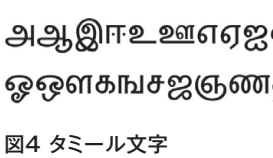

図4 タミール文字

この中西印刷さんの説明によれば、世界には現用文字が28種類、そして歴史的文字が97種類あるとのことで、それがここにコレクションされています。現用文字とは、日刊の新聞が発行されているという基準によるそうです。経済的なシステムとして、やはり数百万人ぐらいの人口がないと日刊の新聞は成り立ちません。ということは、日刊で発行される新聞に記載されている文字は、少なくとも数百万人レベルが理解するということになります。それが１００万人なのか５００万人なのかは個別のケースになりますが、その文字を理解する人がたくさんいない限り、日刊で新聞を発行することは不可能でしょう。そう考えると、今の地球上の主要な文字としては、日刊の新聞に使われている28種類をひとまず基準と考えていいのではないかと思います。

さて私たちはこの28種類のうち、漢字・平仮名・片仮名・ローマ字の四つを使っています。朝起きて朝刊を読むときから夜までに、世界の文字のうち7分の1を日常的に使い分けているというわけです。

◆漢字の難しさ

漢字はやはり難しいという話をよく聞きます。今日ここにお越しくださっている方はおそらく漢字がお好きな方々だろうと思いますが、漢字は好き嫌いのある文字で、「漢字が大好きだ」「どちらかというと好きだ」「どちらかというと嫌いだ」「漢字は大嫌いだ」に分けると、特に若い世代の方々では「漢字が嫌いだ」という方も多いように見受けられます。漢字が好きであろうが嫌いであろうが、それはまったく個人の自由

ですが、そもそも文字が好き嫌いの対象になるということ自体が面白い話です。アメリカ人がローマ字を好きである、嫌いであるということは多分あり得ないだろうと思います。私たちだって、平仮名が好きだ、片仮名が嫌いだということはおそらくないでしょう。しかし漢字は好きな人と嫌いな人にはっきり分かれます。

それはいったいなぜなのでしょうか。そのことは今日の主題ではありませんが、上手に使いこなせたらこんなに便利なものはない、しかしそれを習得するまでには若干の苦労が強いられるというものに好き嫌いが発生すると私は考えています。それは、コンピュータを使って情報を集める、あるいは車を運転するといったことと同様です。

車を運転される方もたくさんいらっしゃると思いますが、教習所に通い始めたころにはSのカーブで脱輪したり、今から思えば懐かしい思い出ですが、やはりそのときは大変です。コンピュータにせよ車にせよ、取っ掛かりの段階ではさまざまな苦労を強いられます。しかしある程度それを使いこなせるようになると、こんなに便利なものはありません。漢字だって、小学校、あるいはこのごろは幼稚園からはじまっているようですが、ごく小さいころから中高校生時代とずっと修練を積み重ねた結果、身に付いている方々が圧倒的多数です。その人たちから見れば、平仮名ばかりで書かれた文章は読みにくいでしょう。

かつてこういう話を教育テレビのある番組で話したところ、視聴者の見知らぬ方からメールをいただきました。メールの内容は、平仮名や片仮名ばかりで書かれた文章は誤読が起こるというもので、その方はお父さんの思い出話をメールでくださいました。

その方のお父さんは、戦前に東京で苦学をしておられました。この「苦学生」というのが近ごろの大学生には通じなくて、彼らは平気で「なぜアルバイトをしないのですか」と聞くのですが、それはさておき、大変な苦労をしながら東京で勉強していらっしゃいました。しかしどうしても生活が大変で、意を決して三重県にある実家まで無心に帰ろうとしました。夜行の各駅停車を乗り継いで三重県の県庁所在地の津まで帰ってきて、そこで持ち金がとうとう底をついてしまいました。ご実家はもう少し先まで行かなければならないので、彼は津から電報を打ちました。当時の電報はもちろん片仮名ばかりで書かれていました。そのころは電報為替という制度があったそうで、三重県の県庁所在地である津からご実家へ、片仮名ばかりで「ツマデキタ。カネオクレ」と打電したら、受け取ったご実家ではそれを「妻できた。金送れ」とお読みになったのです。知らない間に結婚したのだなと、本人には意外なほどたくさんの送金があった、と亡くなった父がよく思い出話をしていましたという内容のメールで、失礼ながら大笑いさせていただきました。

それは、三重県の「津」を漢字で書く、あるいは「妻」を漢字で書けば、意味のちがいは一目瞭然です。「津まで来た」「妻できた」は、片仮名で書くと誤読が起こって当然で、むしろ「妻できた」の方が、より普通の日本語かと思います。「津」は三重県には縁の深い文字ですが、三重県以外の人には「津まで来た」はあまり日常的な言葉ではないかもしれません。いずれにしても、片仮名・平仮名ばかりで書かれた言葉は誤読が起こります。といって、漢字はそうそう簡単に習得できるものではありません。

世の中には漢字が大好きな方もおられて、一番画数の多い漢字はどれかとか、漢字は全部でいくつあるのかという、いわゆる雑学、トリビアをめぐる話がよくテレビのクイズ番組になっているようです。

18世紀（１７１６年）に康熙帝の勅令で作られた『康熙字典』という辞書があり、そこには４万７０００字余りの漢字が収録されています。さらに日本では諸橋轍次先生がお作りになった『大漢和辞典』が、『康

熙字典』に入っている文字を全部取り込んで、さらに日本人が作った国字や『康熙字典』に入っていないものを付け加えられました。正確には4万9970字余りですが、5万字と呼んでいます。さらに中国では『漢語大字典』や『中華字海』などの辞書が作られました。それぞれ約6万字とか約8万5000字という収録字数を誇っています。

中国語は漢字ばかりで書くので、中国人はわれわれよりずっとたくさんの漢字を必要とするのだろうと一般的には考えられがちですが、実はそんなに変わらないのが現実です。後ほど触れますが、常用漢字がかつては1945文字、今は2136字になりましたが、常用漢字だけでは足りないことがあるのは事実です。それでも2500種類も使えば、ものすごく多いという感じです。いまの中国で決められている常用字表は2500字ですから、中国でも基本的には2000字プラスアルファの文字が、よく使われる漢字として意識されています。中国には平仮名や片仮名がなく漢字ばかりで書くからといって、たくさんの漢字が必要なわけではなく、あまり変わりません。

そうすると、この5万字や8万字というのは一体何なんだということになるわけですが、かつて歴史上どこかの物好きが半ばお遊びで作った文字があるとして、それが何らかの字引に1回でも姿を表せば、それ以降に作られる辞書はすべてその文字を取りこんでいきます。収録字数とか収録語数が多いというのは辞書にとって大きな売りです。もちろんできるだけ多くの文字を取りこめば史上最大字数の辞書ができるのですが、そこに入っているのは、実際にはほとんどが「死に文字」で、いつの時代でも3000字もあれば十分だったという状況でした。それでもやはり、3000というのは大きな数です。

さらにそれぞれの漢字の画数が多いということもあります。文献には六十何画のものも出てきますが、少なくとも10画や15画のようなものは頻繁に出てきます。今回「鬱」が常用漢字に入ったことが随分話題になりましたが、「鬱」は29画です。29画というのは信じられない数の多さです。平仮名や片仮名は3画で書けますからね。覚える苦労は格段にちがいます。画数が多いものは、ほかに「蹂躙」「穿鑿」「矍鑠」などがあります。私はこの資料をコンピュータで作っていますので、「かくしゃく」と打って変換したら「矍鑠」となるので大変簡単ですが、これを手で書くとなるとかなり大変です。

◆さまざまな書き方

日本語には実にさまざまな書き方があります。でも「動物園にライオンがいる」という文章はおそらく1種類の書き方しかないと思います。「おやつはプリンよ」も、「おやつ」は語源的には「八つ時」で漢数字の八を書くことは可能ですが、今の日本語で「おやつ」に漢数字の八を書くのはあまりにも非現実的ですので、「おやつ」は多分この書き方しかないだろうと思います。「プリン」もおそらくこの書き方しかないだろうと思います。

いまから十数年前、私のところにイタリア人の女子留学生がいました。ベネチア大学で日本語を勉強して、文部省の国費留学生の資格を得て、漢字の勉強がしたいというので私のところで大学院に入って博士号を取りました。

その学生がイタリアで日本語を勉強していたとき、日本人の先生が読む文章をそのまま聞いて書き取る試験がありました。あるとき先生が「おやつはプリンよ」という課題を出されたのだそうです。そのときに彼女は「プリン」という言葉が分かりませんでした。「プリンって何だろう。おやつだから食べる物だろうけれども、どうも日本には自分が知らないプリンという食べ物があるのだろう」と考えて、彼女は平仮名で書い

たのです。

もちろん先生は×を付けて、「プリンは外来語だから片仮名で書くのよ」と指導します。「えっ、プリンって外来語ですか」「あなた知らない？あの黄色くて甘い」「あぁプディングですか」――外来語である限りそれはプディングであるべきで、プリンという外来語はないのです。日本人はプリンと聞いたらおそらくまちがいなく片仮名で書くでしょうけれども、実はあれは日本語だと彼女はしきりに主張していました。日本で暮らしている西洋系の外国人が一番困るのは、片仮名書きされている外来語だそうです。元の言葉に復元できないので辞書も引けないと、アメリカからの留学生などもよく言っています。

いずれにしても「動物園にライオンがいる」「おやつはプリンよ」は、「動物園」という漢字が書ける小学生以上であれば、99％以上の確率でこの文章における漢字、平仮名、片仮名の使い分けが一致すると考えていいだろうと思います。

しかしそういうものばかりではありません。たとえば下品な例で恐縮ですが「隣の奥さんは別嬪でほんとに羨ましい」、別にわが家の隣に美人が住んでいらっしゃるのではなくて、あくまでも例文です。「別嬪」という言葉を若い世代はほとんど使いませんが、片仮名で書けば、そんな言葉もあるなとお分かりになるはずです。それから「ほんとに」という副詞を「本当に」と書くか。「うらやましい」は漢字で書くか、平仮名で書くか。「隣」「別嬪」「ほんとに」「うらやましい」は、人によってさまざまな書き方が可能です。

同様に「お爺さんが携帯で蘊蓄を傾ける」も、いくつかの単語を平仮名・片仮名を交えて書く方がむしろ近ごろは主流かなという気がします。

さらに品のない例文ですが、「晩ご飯は、たけのこご飯とほうれん草のおひたしです」。たまたま私の大好物を二つ並べているだけの話ですが、これはさまざまな書き方が可能で、ただ一つの書き方として固定はできません。続いて報告される小駒さんが詳しくご説明になると思いますが、日本語には正書法がありません。それが欠点だとよくいわれますが、しかし果たして本当にそうでしょうか。

「携帯電話」に対して、このごろは片仮名で「ケータイ」と書いているケースをよく目にします。そのほかにも通常は漢字で書く単語をあえて片仮名で書くケースも頻繁に目にします。それは文章を書く人間が、あえて片仮名を使うことで、言葉ではなくて文字の使い分けによって意思を伝えようとしているからです。これは他の1種類だけの文字で書く外国語では不可能な芸当です。正書法が確立されていないということはほかでもなくさまざまな書き方ができるということで、それを逆に見ると、自分が伝えたい内容を漢字で書くか、片仮名で書くか、平仮名で書くかというレベルで表現できるということです。これは感性を表現する大変高度な方法ではないでしょうか。「ほうれんそう」をどう書くかはあまり感性には関係しないと思いますが、さまざまな状況において、漢字、平仮名、片仮名の書き分けによって、文章を表現しようとする人間の意思がそこに伝えられるということが、しばしば見えるのではないかと思います。

◆必要な漢字はどれくらい？

では現実問題として、漢字はいったいどれぐらい必要なのかというと、これはもちろん答えが出る話ではありません。接触の仕方によって、それぞれの方々が使い分ける漢字は大きくちがいます。私はかつてこのことについて「ハンバーガーショップ的漢字論」という雑文を書いたことがあります。最近はあまりハンバーガー屋さんには行きませんが、子どもが

小さいころはおまけにつられてよく行きたがりましたので、行くと何とかセットを買います。ハンバーガー1個だけではなくて、ポテトを付ける、アップルパイを付ける、おもちゃを付けるなど、さまざまなセットの組み立て方があるわけです。

漢字を全然使わないわけにはいかないでしょうから、小学校で学ぶ漢字は最低限必要でしょう。小学校で学ぶ漢字を教育漢字といい、それは学習指導要領によって決められていて、いまは１００６文字が小学校1年生から6年生までに配当されています。さきほど最低限といったのは語弊がある言い方で、それだけの漢字で表現できる状況もありますが、「丼」や「鍋」は教育用漢字には入っていませんから、小学校で習う漢字だけでは、牛丼屋さんへ行っても「丼」という漢字が読めないはずです。しかし現実には子どもたちは社会生活を通じて覚えていますので、「丼」は大変簡単な漢字でほとんどの子どもたちは書けますよね。さらにそれを超えるものとして、昨年11月末に告示された２１３６文字から成る常用漢字があります。常用漢字というと、全国民がこれだけの範囲の文字を使わなければならないという誤解を受けることがありますが、そういうものではありません。常用漢字は法令、公用文書、新聞、雑誌、放送、その他の一般の社会生活において使う漢字の目安です。それだけの漢字が使えて、それ以外のものを使ってはいけない、というわけではありませんし、常用漢字に入っている漢字だって別に使わなくても構わないという、非常にフレキシブルな規格になっています。

さらにコンピュータで使えるＪＩＳ漢字の第1・第2水準、これは普通のパソコンや携帯電話で使える漢字で、それが使えれば十分という場合です。世間にはそれほど馴染まれていない世界ですが、第3水準・第4水準のレベルの文字が必要になってくる場合もあるでしょう。もっと特殊な世界になりますと、それこそ『中華字海』8万５０００字が必要というケース、それも明朝体で必要になる場合とか、全書体が必要であるケースまで考えられないわけではありません。現実にはそういうことはほとんどあり得ないと思いますが、想定できるものとして、狭い範囲、広い範囲、いろいろな領域で必要となる世界を切っていきますと、このように場合分けができるかなという気がします。

◆当たり前のことですが…

しかし文章を書くのは私たち個人個人で、機械が書いてくれるわけではありません。コンピュータで漢字仮名混じり文が書けるものがはじめて発売されたのは１９７９年でしたからもう30年ほど前の話になります。そのころは何百万円もする機械でしたから、一般の人間にはまったく無縁のものでしたが、10～15年ぐらい前から小型のワープロが普及し、やがてパソコンに変わって、携帯電話あるいはパソコンによるインターネットが爆発的に普及しました。携帯電話では本当に老若男女、小学生からご年配の方々まで、街角で立って信号待ちの間にメールを打っている姿まで目にします。これだけたくさんの方が電子機器を使って日本語を書く状況が起こるとは、少なくとも30年前ぐらいには夢にも思わなかったにちがいありませんが、それが情報産業の発展、高機能化、低価格の進行とともに爆発的と言っていいほど普及しました。

当初は、機械で書かれる言葉は味気ないとか、心がこもっていないとか

いわれました。また年賀状をワープロで作るのは失礼であるといわれたこともありました。ワープロを使うと、「御目出度う」のようにやたらと漢字をたくさん使う傾向がありました。このごろはだいぶコントロールされているようですが、しばらく前のコンピュータで使われたソフトでは、よりたくさん漢字に変換することがすぐれた性能だという傾向が如実に感じられた時期がありました。めったやたらと漢字にしようという動きが、かつての電子産業にはあったように思います。

手書きではなく機械で書く日本語には心がこもっていない、漢字がたくさん使われすぎるなど、さまざまなメリット、デメリットがあちらこちらで論じられてきました。今でもその議論はもちろんあると思いますが、しかしそれはしょせん文房具の変化です。かつて奉書に毛筆で文章を書いていた時代から、明治から大正時代あたりに西洋紙に万年筆あるいはボールペン、鉛筆で文字を書くように変わってきました。筆記用具の変化が文体の変化を起こすことは、歴史的な事実として当然あるものです。

「Style（スタイル）」という英語は人間の姿形ではなくて、もともと文体を意味する英語だったのだそうです。その「Style」の語源は「鉄筆」を意味するラテン語です。古代ローマでは板の枠に蝋を詰めたタブレットが使われていました。蝋ですから温めると溶けますが、冷やすとまた固まって元の平面に戻るので、万年ノートとして使えます。その蝋板に先の尖った鉄筆で文字を書いていました。このガリ版を切ったときのような鉄筆をラテン語では「Stilus（スティラス）」といいます。これが英語の文体を意味する「Style」の語源になっており、このように文体を決めるのは筆記用具であるということは、洋の東西を問わず、古今を問わず指摘できる事柄です。

筆記用具は、この１００年ほどのあいだに毛筆から鉛筆・ペン・ボールペンへと変わり、そして今、筆記用具として電子機器が起こってきました。そのときに、ワープロ・パソコンが自分の側で文章を作ってくれるわけではありません。こちらが書きたいことばを入力し、それを漢字に変換したら、向こうがしかるべき候補を出してくるのです。「これこれこういう内容のことを書きたいのだけれど、書いてくれないか」と言っても、残念ながらパソコンはしてくれません。したがって自分が知らない単語を機械で出すことはできないわけです。

たとえば「矍鑠（かくしゃく）」という言葉があります。「あのおじいさんは90歳を過ぎても、毎朝公園でラジオ体操をしている。ほんとに矍鑠としていらっしゃるね」というように使いますが、この「矍鑠」を知らなければ、文中には使えません。パソコンの側が「そういうのを矍鑠と言うのですよ」と教えてはくれません。要するにコンピュータを使おうが手で書こうが、基本的には自分が考えた文章を、筆記用具としてのパソコンを使って書いているということを、もっと真正面から見なければいけないのです。

パソコンの漢字変換に引きずられた日本語を近ごろはしばしば見かけます。たとえば「雨に降りこめられる」や「駆けつける」というときに、後半にある「こめられる」の部分が「込められる」となったり、あるいは「つける」を「付ける」となったりするなど、動詞が二つ並んだ時にあとの方の動詞を漢字にしている表現が目立ちます。このような文章をかつて手で書いていた時には、「今日は雨に降りこめられた」「急いで駆けつける」と平仮名で書いていたのではないかと思います。ところがコンピュータはそこの部分を漢字に変えてくることがあります。私は余計なことだと思うので、なるべく書き直すようにしています。

情報機器の普及のおかげで、漢字を書く作業がかなり楽になりました。そこでもっともっと強調すべきは、機械が出しゃばってくるのを防

ぐことではないかと思います。当たり前の話ですが、文章を書く者の言語的主体性の確立が必要です。文章を書く人間が「こういう文章を書くのだ」としっかり意識を持つことが必要です。自分が機械を使うのであって、機械が自分を使うのではないことが、もっともっと認識されていくべきではないか、それによって自分に最もぴったり、しっくりくる日本語の書き方が成立してくるのではないかと思います。